

実践ノート

「看図作文」の授業レポート —「20 枚の絵図」で願いを伝える—

森 寛¹⁾

MORI Hiroshi

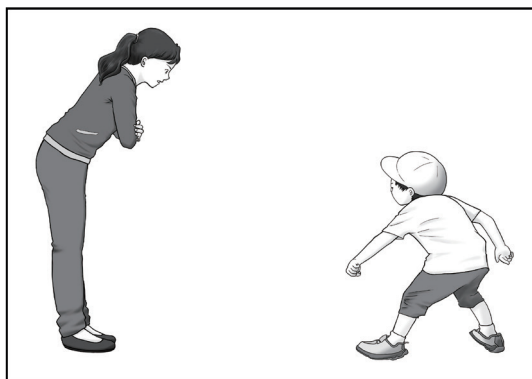
キーワード：看図作文・20 枚の絵図・授業者の願い・どんでん返し

0. 「Shikana i」……

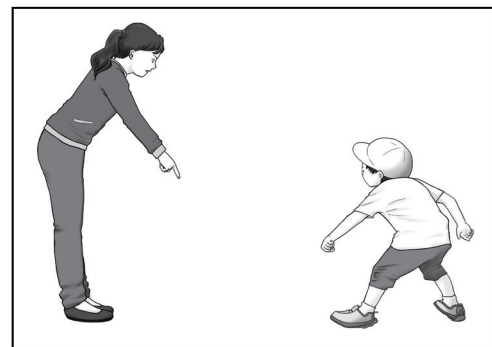
2021 年 10 月 5 日。帰宅後、家のパソコンの「新着メール」を見てみると、「Shikana i」の文字が……。おそるおそる開いてみると、次のようなメッセージが入っていました。

絵図ができあがりました。
インパクトがある子どもの姿勢が
5 つできました。
A から E まであります。
おとなの姿勢は 4 つです。
 $4 \times 5 = 20$ パターンあります。
それをまず順番に送ります。

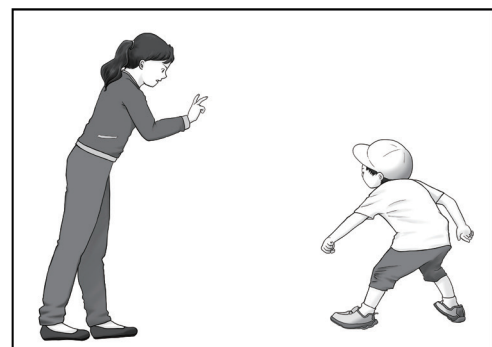
そして、添付された絵図を見ると……。



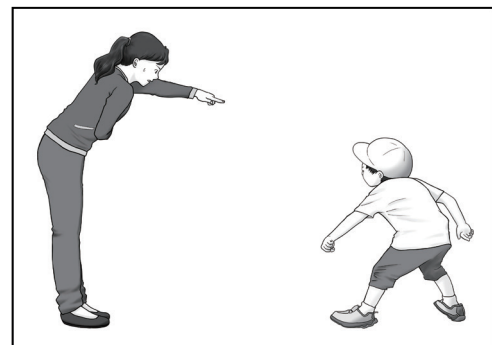
A①
(本稿で紹介する絵図は全て ©yuki.ishida)



A②

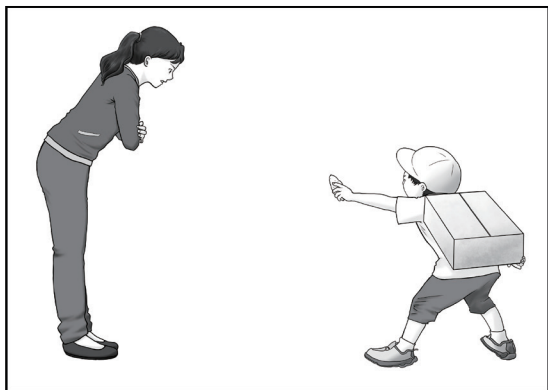


A③

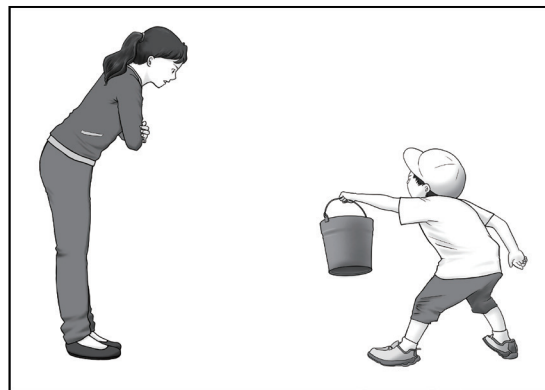


A④

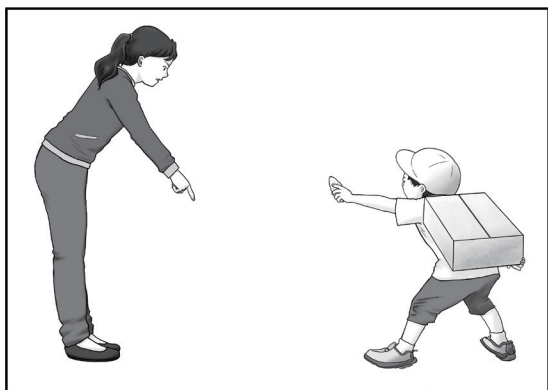
1) 札幌市立西野中学校



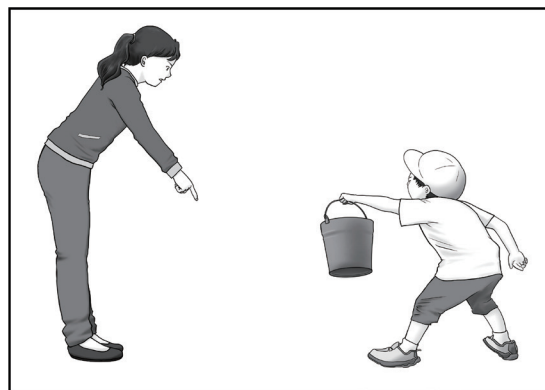
B①



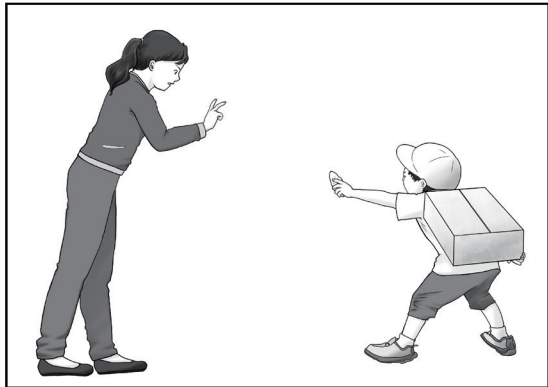
C①



B②



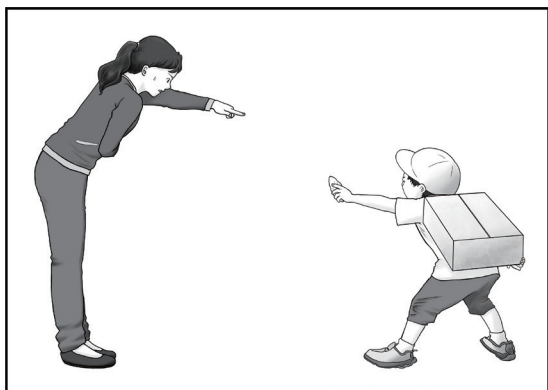
C②



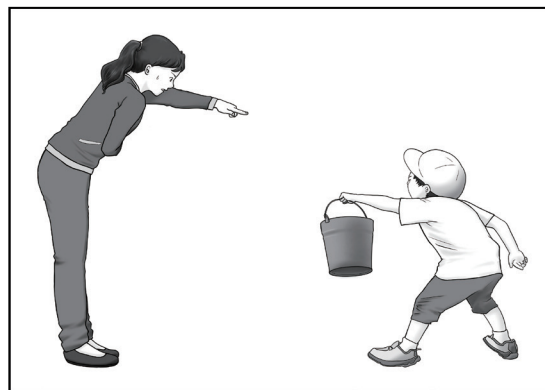
B③



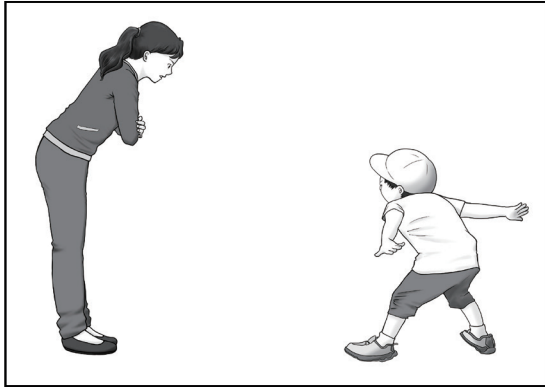
C②



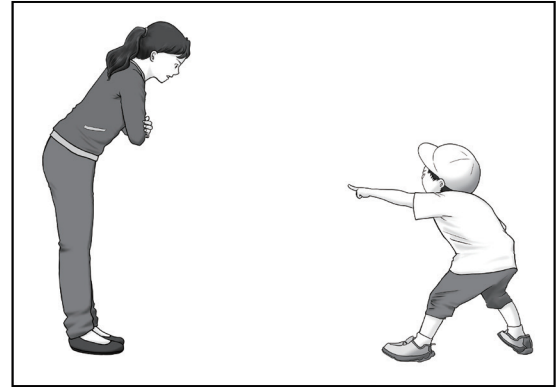
B④



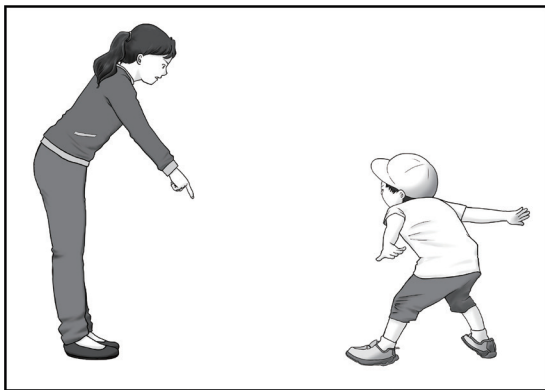
C④



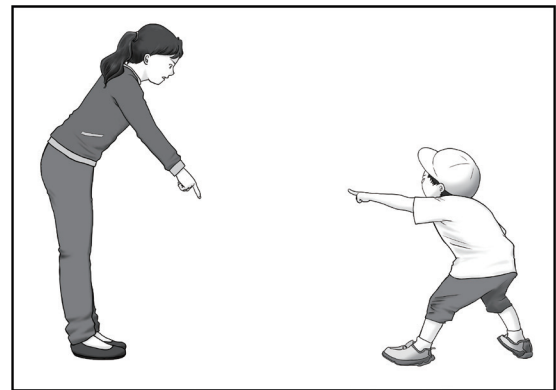
D①



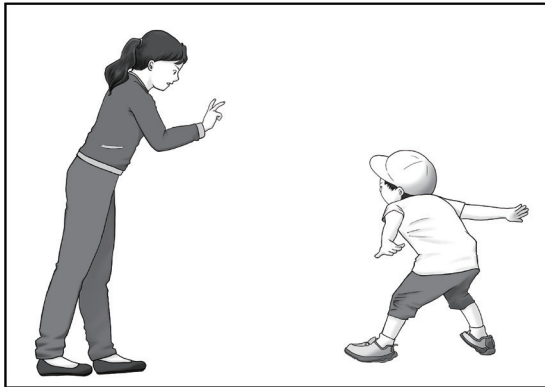
E①



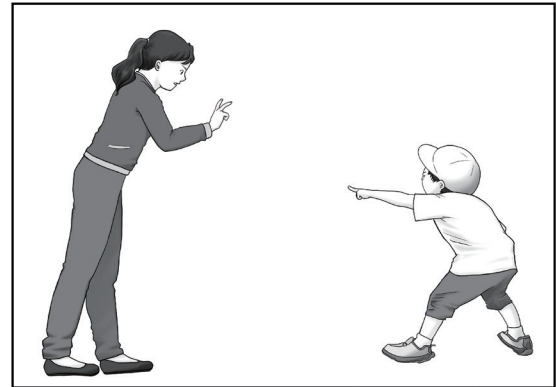
D②



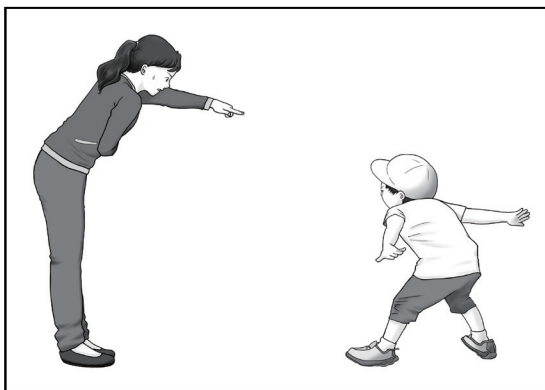
E②



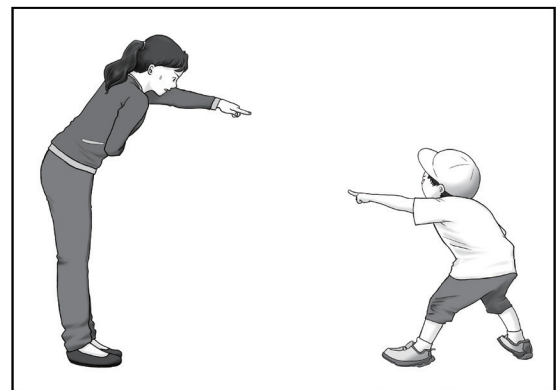
D③



E③



D④



E④

本当に 20 枚、ありました。20 枚！ 20 枚？
そうです。20 枚です。20 枚って……。

この後、試行錯誤が何か月も続きました。授業が形になるまで、相当の時間を要しました。それでもなんとか、年度内に授業をおこなうことができました。それをいち早くレポートします。どうぞお楽しみください。以下、文体を常体にします。

1. 「20 枚の絵図」と出会う

2022 年 3 月 7 日。鹿内先生と石田先生が見守る中、授業が始まる。

お待たせしました。ひさしぶりの看图作文の授業です。今日は、おふたりの特別ゲストにおいでいただきました。一人は、看图作文を中国から日本に導入した鹿内信善先生。もう一人は、看图作文に使う絵図を描かれる石田ゆき先生です。

おふたりに自己紹介をしていただいて、教室は拍手で盛り上がる。

そういえば、2 学期の「看图作文」の授業、はじめは、「ネギをめぐる戦い」でした。このとき、絵図は 1 枚でした。次に、「イスの世界」でストーリーをつくりました。このとき、絵図は 2 枚でした。

生徒はうなずいて聞いている。

さらに、前の時間の「新・桃太郎」。絵図は、3 枚でしたね。

何が始まるのか、生徒はやや不安げな顔になる。

今日はなんと……。

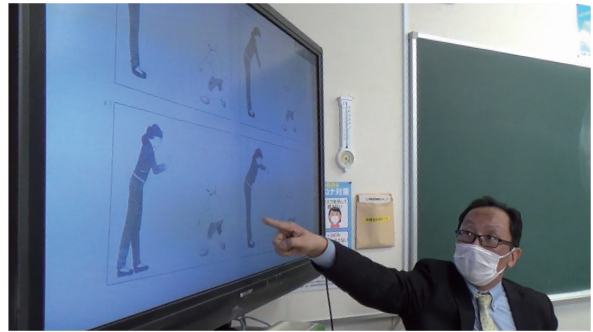
間をあける。

今日はなんと、絵図は 20 枚です！

えー？！

という声。声にならない声。隣同士で顔を見合わせる者たち……。説明を続ける。

その 20 枚の絵図は、こちらです。



（編集委員会注；実践当日は複数の授業を撮影した。しかし、本実践の授業動画の撮影ができていなかった。そこで、本実践とは別のクラスで撮影された動画から、授業風景を紹介していく。）

実物投影機を使って、順番に 4 枚ずつ見せていく。後ろの席の生徒にも細かな違いがわかるように、画面を指でさしながら説明する。

20 枚すべてを見せた後に、こう伝える。

1 枚、2 枚、3 枚。そして、今日は 20 枚……。でも、大丈夫！みなさんなら、できます。

2. 絵図は、自分で選べない？

3 人グループをつくれます。机を合わせてください。

生徒は、机を合わせ始める。

じゃんけんで「今日のリーダー」を決めます。勝っちゃった人がリーダーです。はい、じゃんけん！

じゃんけんをするだけで、生徒は喜ぶ。

はい、勝っちゃった人、前においで。

「今日のリーダー」が教卓に集まる。「20 枚の絵図の入った封筒」と「作文記入用紙」を手渡す。

この後の生徒の動きは、やや複雑になる。次のように説明する。

封筒の中身を見てごらん。絵図が 20 枚入っています。

3 人は、1 枚ずつ並べ始める。手にとって眺めている者もいる。

では、その 20 枚、全部をウラにしてください。



何が始まるかわからない生徒。おずおずとウラにし始める。

20 枚全部、ウラの状態です。どんな絵図なのか、まったくわかりません。このわからない状態で、ウラのまま、ひとりに 3 枚が手もとにきます。

まずは、「今日のリーダー」、1 枚だけ、ウラのまま取っちゃってください。

「今日のリーダー」は 1 枚、手に取る。

次は、時計回り。リーダーの左隣の人。1 枚、取ってください。

リーダーの隣の生徒が 1 枚、取る。

次は、最後の一人、1 枚もらいます。

3 人目が 1 枚、手に取る。

これで、ひとり 1 枚ずつ、手もとに来ましたね。おんなじことをします。「今日のリーダー」から順番に、今度は 2 枚目を引いてください。

グループの 3 人の手もとに、2 枚ずつ絵図がきた。

最後、3 枚目です。おんなじように、ウラのまま、手に取ってください。

要領に慣れてきたせいか、グループの 3 人はにこやかに 3 枚目を手に取る。

3 枚の絵、そろいましたか？ では、お待たせしました。自分の絵図をオモテにしてみましょう。

え〜っ？ まじい〜？ ……。

教室がにぎやかになる。

今、手もとにやってきた 3 枚で、看図作文を書きます。3 枚の順番は自分で決めていいです。作文記入用紙は、リーダーからもらってください。

無理難題を言われて、どのグループも生徒は、悩み始める。

リーダーに大切な連絡です。机の上に「選ばなかった絵図」があります。11 枚あるはずです。それを全部、封筒に入れて、次の時間、必ず持ってきてください。ノートにはさんでおくと、いいです。

それぞれのグループのリーダーは、残りの絵図の入った封筒を、ノートにしまい始める。

3. さあ、執筆開始！

自分の手もとにきた3枚の絵図、どんな順番だと、ストーリーができそうですか？1分だけ、待ちます。決めてください。

生徒たちは、考え始める。すぐに決められる生徒もいるが、頭を抱えている生徒もいる。「これで、できるかあ？」などと周りに助けを求める生徒もいる。まだ決められない生徒もいるが、次の指示を出す。

順番が決まったら、作文記入用紙にノリで貼ります。ノリがない人は、周りから借りて、貼ってください。

大方の生徒が貼れたところで、にっこり笑って、恒例の指示を出す。

準備ができたところで、書き始めます。締切は、今日中です。がんばってね～。



え～っ！

という声を無視して、教卓に座る。

と、ここまでで1時間である。

その日の帰りまでに、国語の教科係が作文を集めて、私のところに持ってくる。放課後、ほっと

したところで、集まった作文を読む。「これは、次の時間にシェアしたい！」と思える「優秀作文」を選ぶために、念入りに読む。

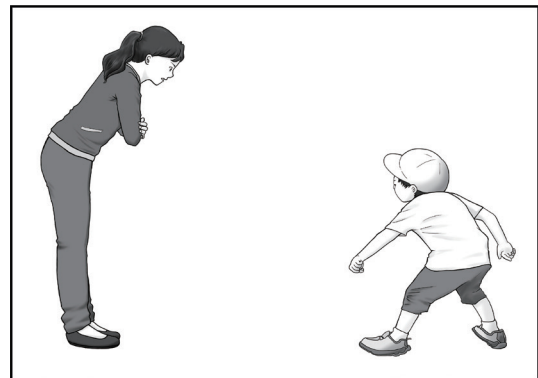
4. 優秀作文を読み合う

次の時間。「優秀作文の紹介」である。

まずは、1人目。3枚の絵図には、わりと変化がある。次のような作文を書いた。（明らかな誤字は直したが、表記は原文のままとした。ただし、読みやすさを考慮して、適宜、改行している。以下、同様。）

作文例1（2年〇組 H・Y）

「蟻を手に入れたい」

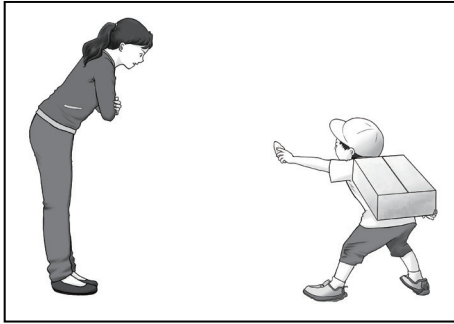


A①

私は、クリスティーナ・ディローニー。私は保育士でありながら、蟻の研究をしている。自分でいうのは気が引けるけど、一部のマニアの間ではとても有名な研究家。まあ、まだこの保育園の人には気付かれてはいないけど。

「ディローニー先生！」ガルトスト・イベントテスト君が走ってきた。とても驚いているようだ。何があったのか私は聞いた。すると「あっちにめちゃくちゃでかい蟻がいました！ちょっと見てください！」

一緒に見てなんて子供っぽいな、と思ってから数秒後、「蟻ー!？」と声を出して驚いて、食い気味に「行きましょ、行きましょ。」と言ってしまった。「ディローニー先生？」とイベントテスト君に言われ我に返り、「どれどれ。」と蟻の行列を見た。

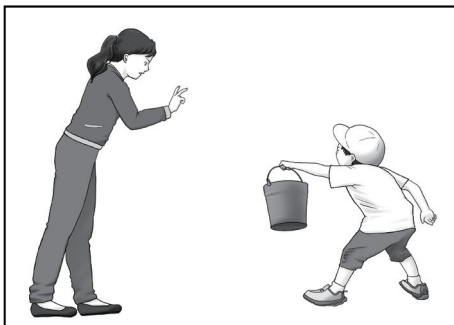


B①

しかし何分経っても、うわさのかい蟻がいない。また子供の嘘か、と思って「そろそろ戻ろう。」と言ったその時、「いた!!」と大声を出した。

「えっ!？」と言い、振り返ると本当にいた。大きさは多分5センチメートルくらいだろう。そしてとても色は鮮やかで見とれていると、「あっち行った!! 捕まえよう!!」と言うので、これはチャンスだと思い、「そうね、捕まえましょう。」と言った。

しかし蟻は、普通の蟻よりすばしっこく中々捕まえられない。なので私は近くに落ちてきた誰かのリュックを取ってくるように指示し、一旦そこに入れようとした。心の中では、後で他の物に詰め替えて持ち帰ろうとした。



C③

なので私は綺麗なバケツを持ってくるよう言った。イベンテスト君は急いで取りに行った。心では、子供は素直、こういう所は扱いやすいわね、と思っていると、「ディローニ先生!!」とバケツを持ってやってきた。よくやったと思い、ピースサインをした。

蟻をバックから探し出し、バケツに移し、

走って自分の車にある研究用のビンに入れて戻っていった。

「どうしたの? ディローニ先生?」と言われたので、とっさに「急な用事を思い出したのよ。」と嘘をつき、イベンテスト君はそうだったんだという顔をした。どうやら信じてくれたように見える。

でも、あんな蟻は見たことがない。イベンテスト君には感謝しかないと考えたが、感謝すると不自然なので感謝を口にはしなかった。

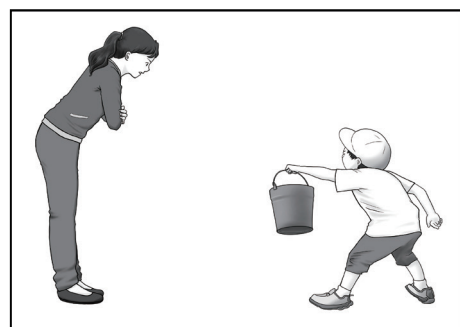
なぜ「蟻」が出てくるのかと思って、この生徒の作文記入用紙を見てみると、2枚目の絵図の子どもの足元に、小さな印刷の汚れがある。ひょっとしたら、これを蟻としたのかもしれない。だとしたら、授業者が意図していないイレギュラーなことも、生徒は作文の材料にうまく取り込んでいたことになる。

また、登場人物の名前が「クリスティーナ・ディローニー」「ガルトスト・イベンテスト」と、なぜか外国人のようである。語り手をディローニー先生にして、最初から最後まで彼女の視点で一貫している。最後の絵図の「ピースサイン」の意味も、ちゃんとストーリーに位置づけている。なかなかしっかりした作文である。

2人目の作文。2枚目と3枚目の絵図は、ほとんど変わり映えしない。それでも、こんな作文を書いてきた。

作文例2 (2年〇組 Y・H)

「白線」



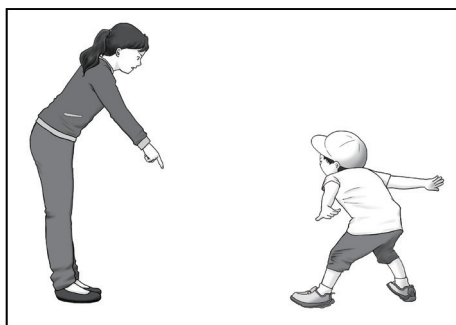
C①

「ほら、水持ってきてやったぞ。」子供はそういった。「そこにおきなさい。」母親はそういった。「あ、こっちに入ってこないで。今入ってきたでしょ。」母親は、棘のあるようにいいはなった。

なぜこのような会話をしているのかというと、さかのぼること数時間前のことだ。「ここからここまで俺のじんち〜。」子供はそういった。母親は強きに「じゃあ、ここからここまで私ね。入ってこないでね。」母親は育児につかれ、休みたかったのだ。

だが、母親は気づいてしまった。ここは庭で、私のじんちには壁と草しかない。だが、子供の方には家がある。出入りしようだ。

そんな風に考えていると、のどがかわいてきた。今日は真夏日だ。このままでは熱中症になってしまう。私のプライドがじゃますが、意をけって言った。「水とってきてくれる。」そして、ぼうとうにもどる。



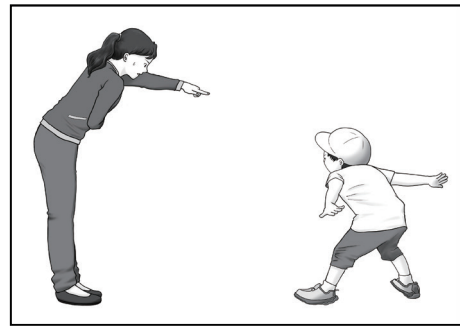
D②

「ほら、ここ足あとがついてる。」母親はにらみつけながらいいはなった。「いや、線の真上だからセーフだって。」子供も負けずおとらず子供ができる精いっぱいにらみながらいった。「何。口ごたえするの。夕ごはんぬきにするわよ。」母親は育児でたまりにたまったストレスがばくはつしている。

子供はあきれたようにためいきをつきいった。「ママはどうやって夜ご飯を食べるの。家はこっちのじんちにあるから入れないよ。あたえる側はこっちだけど。セーフだよね？」

母親はまたもやプライドがじゃましている

が小さい声で「セーフでいいわよ。」といった。



D④

時はすぎ夜の7時だ。ふつうならもう食べ始めている時間だ。父親は仕事から帰ってきている。家の中に母親がいないことを何とも思わないのか、声をかけてこない。どうかしている。庭から部屋を見るとおいしそうなピザを食べている。

見ているとお腹から音がする。こちらが見ているのを気づいたのか、こちらに体を向けおいしそうにほおばっている。

母親はさらにイライラしてくる気持ちをおさえ、手で招きこちらにこさせようと試みる。それに気づいた子供はえんがわから外に出て「ビュウウウウン。飛行機のまねエエエエ。」そう叫びながら走ってきた。

「何。」そう聞いた。「あそこのピザ、私にもちょうだい。」母親は昼から何も食べていない。子供は口を大きくあけ大きな声でいった。「嫌だねー。飛行機出発しまあす。」母親は泣いた。

1枚目の絵図のストーリーで、「そして、ぼうとうにもどる。」がうまい。

2枚目の絵図の「子供のポーズ」を「白線を踏んでいないと言い張るセーフ」と意味づける一方で、3枚目の方は「お母さんを挑発する飛行機のマネ」としている。これも見事である。

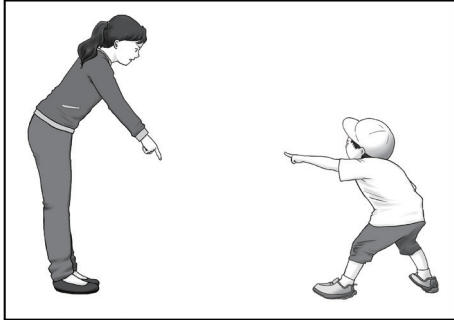
ただ、気になることもある。「父親が育児に無関心で、母親がキリキリしている」といった設定だ。これはフィクションであるといいのだが。

つづいて3人目である。この生徒は、1枚目の

絵図に「しおれた花」を自分で書き足していた。
変化の少ない絵図を手にして、悩んだのかもしれない。こんな作文である。

作文例 3 (2 年〇組 N・I)

「ジャンケン」



E②

小学 2 年生の太郎くんとお母さんの日常の様子を少しのぞいてみましょう。

とても天気の良いある日の午後、お花が枯れそうになっているのを見つけました。

太郎「ママ!! お花が枯れそう。」

母「じゃあ水あげといて。」

太郎「めんどくさーい。ママやっといて。」

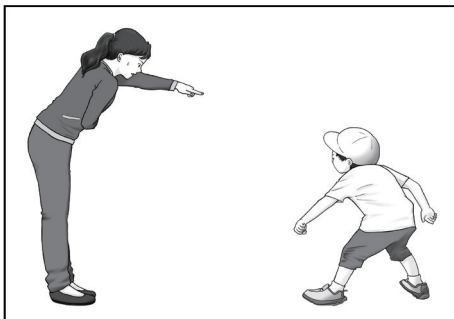
太郎は指をさした。

母「指さしたらダメでしょ!!」と言いながら母も指をさした。

太郎「ママだってさしてるじゃん!!」

母「……まあいいわ。じゃんけんをして負けた方が水を取りに行きましょう。」

太郎「いいよ!!」



A④

太郎「最初はグー。」

太郎はいきおいよくかまえ、お母さんも大

きく手をふる。

太郎「ジャンケンポン!!」

太郎はパーで、お母さんはチョキ。母の勝ちだ。

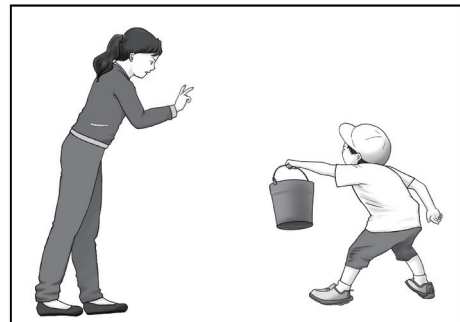
太郎「えー、やだ。」

母「負けたんだから、とりにいきなさい。」

太郎は嫌がりながらもけっきょく取りに行くことにした。

庭を出て家の裏にある物おきに行くと、バケツがあった。太郎はバケツをもち、じゃぐちまで持って行った。

その間、母は庭の手入れをしていた。



C③

太郎「ママ! 水、持ってきた。」

太郎はいきおいよくさしだした。

母「おそかったじゃない。はやく水あげな。」

太郎「わかった。……あれ、水はいつてない。」

母「あんた、水どこにやったの。」

太郎「どこにもやってないよ。」

太郎と母は、太郎が来た方を見た。

すると、太郎がどこを通過してきたかはっきりわかるくらい水の跡がついている。バケツを見ると、穴があいていた。

母はあきれて、「2 回目はこわれてないものに水を入れてきなさい。」

母はめんどくさくなり、自分が行こうか迷ったが、太郎に行かせることにしたのだった。

またいつかこの家族をのぞいてみることにしよう。

……と、終わる。機会があれば続編を書きたい、と思っていたのだろうか。

この作文も、母と太郎の「指をさしていること」の意味づけや「バケツを登場させること」の必然性をうまくまとめている。

ドラマの脚本のように、「台詞」と「ト書き」のスタイルで書いているところも、ユニークである。

少ないクラスで5・6編、多いクラスでは8編ほど、次の時間の最初に「優秀作文」として紹介する。この時、作文に使った絵図を実物投影機で見せながら、読み聞かせをした。なにせ生徒は、20枚の絵図のうち、自分の手もとある3枚しか手にしていないからだ。

自分の絵図とは異なる3枚で書かれた優秀作文を聞きながら、生徒たちは心から感心した表情を浮かべている。

5. この授業で伝えたい「メッセージ」とは？

この授業は、年度末の3月におこなった。私は「優秀作文」を読み終えた後、生徒たちに次のような「メッセージ」を贈った。

実は、この授業を通して、みなさんに伝えたい「メッセージ」がありました。それは「与えられた環境」を活かして、仲間とともに「さらに充実した環境」を自分たちでつくってほしい、ということです。

今をさかのぼること1年前。4月にみなさんは「2年生」になりました。1組から5組まで、それぞれのクラスでの生活がスタートしました。メンバーもガラリと変わって、最初は慣れない環境で、心ぼそい思いで教室に来ていた人もいたでしょう。

でも、1学期、2学期、3学期と、もう3月です。きっとこのクラスのほぼ全員が、自分らしさを自然に出し合って、今のクラスが大好きになっているでしょう。ひょっとしたら、クラス替えなんかしないで、このまま3年生になりたいと思っている人が多いんじゃないでしょうか。

多くの生徒が、うなずきながら聞いている。

こんな学年は、珍しいです。1組から5組まで、全部のクラスがそれぞれ独自のカラーを出して、どこのクラスにいても、ほとんどの生徒がクラス替えなんてない方がいいって思っているんですからね。これは、ひとえに4月からのみなさんの心づかいや努力の積み重ねがあったからでしょう。

でも、残念ながらクラス替えはあります。どのクラスも、ぐっちゃぐちゃにシャッフルされます。今度の4月には、新しくなった3年1組から3年5組まで、メンバー全員また、あの心ぼそい気持ちになることでしょう。

にこやかに聞いていた生徒も、表情が曇ってくる。

顔が曇ってきましたねえ（笑）。ここで最初にいった「メッセージ」をもう一度、伝えましょう。私は、こう言いました。「与えられた環境」を活かして、仲間とともに「さらに充実した環境」を自分たちでつくってほしい、です。

4月、3年生になる時に、クラスのメンバーは選べません。担任の先生も、教科担任の先生も自分では選べません。全部決められたもの、全部与えられたものです。「与えられた環境」を受け入れて、それを活かすしかないのです。

実は、今回の看图作文の授業も、同じようなことをしています。20枚の中から3枚の絵図を手に取りました。でも、これは自分で選んでいるようで、厳密にはそうではありません。なにせウラにした状態から、手に取ったわけですから。

そんな「与えられたもの」を使って、みなさんは今回、素晴らしいストーリーをつくりました。見事なまでに「さらに充実し

たもの」を創り上げたのです。ここに紹介した作文の中には、「こんな3枚で物語なんかできないよ。」と言いたくなるような3枚から、「おおっ！」とみんなが驚くストーリーを生み出した人がいました。

4月になったら、これと同じことをみなさんに期待したいな、と思います。みなさんなら、それができます。信じています。

曇っていた表情が、ようやく和らいでくる。

6. 一難去って、また一難！

……と、ここで授業が終わるとカッコいいのだが、世の中はそんなに甘くない。間髪入れずに「次の一手」を放つ。

さあ、尊い「メッセージ」を受けたみなさんに、さらなる試練が待っています（笑）。前の時間、リーダーだった人、手を挙げてください。（挙手を確認して）ノートに封筒が入っていませんか。それを出してください。

教室が少々、ざわつき始める。

その封筒の中身を出してください。なんと、11枚の絵図が残っています。なんだかもったいないですねえ（笑）。

ざわめきが広がる。

尊いメッセージ、「与えられた環境」を活かして、仲間とともに「さらに充実した環境」を自分たちでつくってほしい、が実感できた今、その教えを胸にもう一度、作文を書きます。今回が「本番」です。前回は「練習」です（笑）。

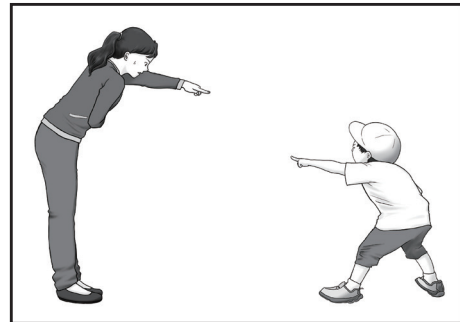
まさかのどんでん返しに「え～っ！」という声上がるが、かまわず進める。生徒も慣れたもの

で、さっそくまた、絵図をウラにして、3枚ずつ取っていく。

では、ここからその「本番」の作文を紹介する。すでに紹介した3名の「2回目」を順番に載せる。まずは、1人目である。

作文例4（2年〇組 H・Yの2作品目）

「うそ」

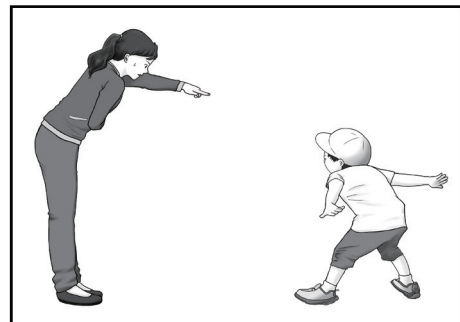


E④

「おい!! お前!!」デパートに来ていた少年は、デパート全体に響くような大声でさけび、近くの女性を指さした。「何よ!？」指をさされた女性は少年を威圧するような声で言った。

少年は少しひるんだように見えたが、すぐ「そのドーナツをよこせ!!」と言った。そう、そのドーナツというのは、とあるドーナツ作りを極めた職人が作って、それを20個限定で出張販売をしている。そしてこの女性がラスト1個を手に入れたのだ。

女性は少年を指さし、「お前に運が無かっただけだ。」と言った。

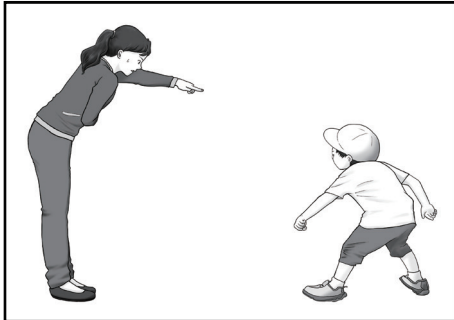


D④

少年はそれでも「いいからよこせ!!」と言った。いいかげん女性も、こいつしつこいなあ、という表情を浮かべた。少年は変なポーズを

して、女性に突進していった。

女性はとっさに体を動かし、よけた。「なに
するのよ!!」女性もさすがに怒って怒鳴った。
少年は何度も変なポーズで突進してくる。し
かし、少年はすぐに疲れ果てた。女性は少年
を指さし、「さすがにそれはだめでしょ。」と
言った。だが、少年は「だったら、そのドー
ナツをよこせ!!」と譲らなかった。



A④

そして、少年と女性はい論を始めた。しか
し少年はへりくつばかり並べて、女性は次々
と論破していく。次第に少年は後ずさりをし
ていった。

女性は少年を指さし、「あなたが私に口論で
勝とうだの考えるのは100年早いわ。家に帰っ
て出直してきなさい。」と言った。

少年は泣きそうになりながら震えた声で
言った。「マ、ママが入院してて、ど、どうし
てもそのドーナツが食べたいって言ってたん
だ。」と言った。

女性もさすがにドーナツを渡そうと近づくと、
少年はドーナツを渡される前に強引に奪っ
た。「入院してるのは嘘だよ〜ん。」と言った。
さっきのも嘘泣きのようだ。

私、ドーナツ職人の努尾名津（どお・なつ）は、
大の大人と少年の見苦しい争いを目の前で見た。

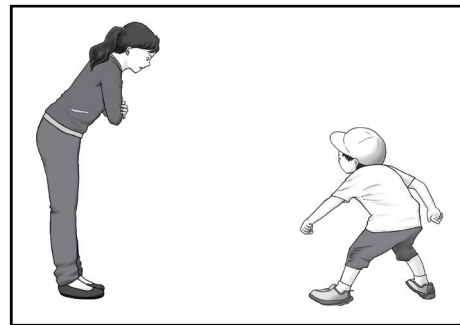
2回目の「本番」の作文では、3枚とも子ども
は何も持っていない。しかも、3枚とも女性が指
をさしている。よくこの組み合わせで、ストーリー
が創れるものだ。

1枚目の「練習」では「クリスティーナ・ディロー
ニー」や「ガルトスト・イベンテスト」といった
舌をかみそうな人物名であったが、2枚目の「本
番」では、「女性」と「少年」に変わった。そう思っ
ていたら、最後に二人のやりとりを見ていた語り
手を、ドーナツ職人の「努尾名津（どお・なつ）」
としている。やはり、人物名にはこだわりがある
ようだ。

つづいて2人目である。

作文例5（2年〇組 Y・Hの2作品目）

「モンスターがあらわれた」



A①

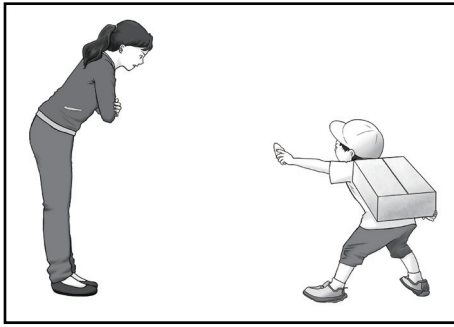
「ああ。こんなことになるなら、村からで
なかったのにー!」ことのほったんは数時間
前のこと。「俺は勇者になってこの世界を救う
んだ。さよなら俺の故郷。」そう、この世界は
悪の魔王にしいはされている。だから、勇者
になり救おうとしている。

村から出ると、暗くて大きい森があり、いっ
しゅん気がひけたが、進むことにした。おび
えながらも一步一步進んで行く。

ガサガサ。いきなり音がした。おそろおそ
る音のした方に行くと……。モンスターがあ
らわれた。「わああ、モンスターだ。うわ、て
か相手レベル10じゃん。こっちはそうびなし
のレベル1だっていうのに。まけちゃうよ。」

バンッ。あんのじょう、一発でやられてし
まった。「まずは平原でレベル上げして、それ
からリベンジだ。でも、それよりも先に防具
と武器だよな。」手にいっぱいのおこづかいを

にぎりしめ、店に向かった。



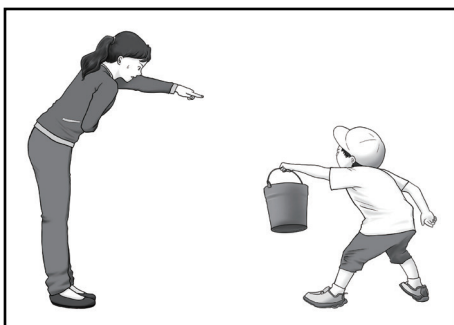
B①

よし。とりあえず防具も武器もレベルを上げた。防具は 140 円もした。ダンボールのよろいに、予算オーバーで武器は買えなくて、そこらへんに落ちてたとがった石だ。この前のすでよりかはいくぶんかいだろう。レベルも 1 から 8 まで上げた。

なんてことを考えながら歩き、森についた。むしゃぶるいがする。やっぱりこわい。だけど、リベンジするって決めたんだ。そう心にいい聞かせ、森の中へと進んでいく。

ガサガサ。よし、こんどこそ。モンスターがあらわれた。足よ動け。よし、すばやさはこちらの方が上だ。くらえっ。モンスターにダメージ。

「え。」おもわず声に出た。そのしゅんかん、モンスターのこうげきをくらい、やられてしまった。



C④

目がさめたら、ベッドでねていた。起き上がり周りを確認すると、今いるのは宿ということがわかった。鏡で自分の姿を見ると、「うそだろ。」昨日買った防具がない。「これから

どうしよ。」と考えていると、「どうしたの。」うしろから声がした。

他にたよりもないし、なにがあったか話した。すると、「そのモンスターは水が弱点だよ。一滴でもふれたらたおせる。がんばってね、小さい勇者君。」そういうとお兄さんはきえていった。「よし。これはいいことをきいたぞ。」近くにあったバケツにいっぱいの水をいれ出發した。

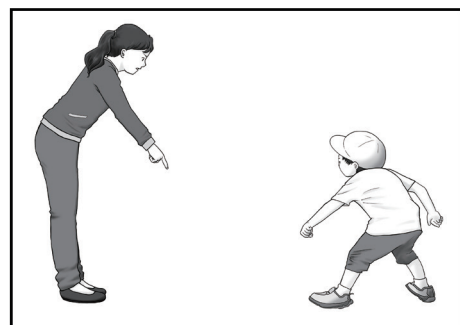
ガサガサ。よし。モンスターがあらわれた。「いけえええ。」水をおもいっきりぶっつけた。モンスターはひめいとともにきえていった。モンスターの情報が更新されみると「水以外の攻撃はほぼ無効。」とかいていた。「こりゃ、かてないわけだ。」

1 回目の「練習」の作文より、2 回目の「本番」では、絵図の変化は大きい。これを活かして、ポケモンのようなゲーム仕立てでまとめてきた。「与えられたもの」を活かして、「さらに充実したもの」をつくらうとしたのであろう。

最後に、3 人目である。1 回目の「練習」の作文の終わりに、「またいつかこの家族をのぞいてみることにしよう。」と書いていた生徒である。予告どおり、2 回目の「本番」で「この家族」の続編を書いてきた。

作文例 6 (2 年〇組 N・I の 2 作品目)

「クワガタ」

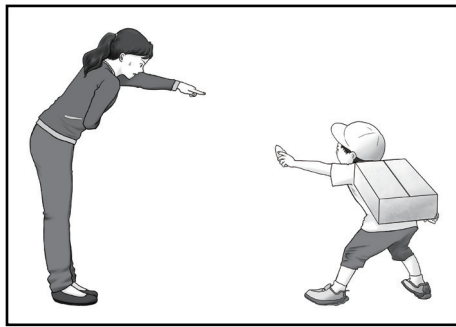


A②

こんにちは。今日も小学 2 年生の太郎くん

とお母さんの日常の様子をのぞいてみましょう。母は庭の草刈りをし、太郎くんは庭であそんでいました。すると、母が「キャー、虫!! 太郎、助けて。」

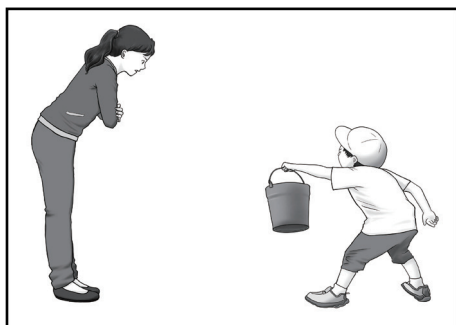
太郎くんが近よると、そこには大きいクワガタがいました。太郎くんは大喜び。クワガタを手にとりまたあそびに行きました。



B④

太郎くんはクワガタのまねをするため、背中にダンボールをしょい走りまわっていました。するとお母さんが「クワガタがかわいそうでしょ。はやく逃がしてきなさい。」と言いました。太郎は「やだ!! クワガタ飼いたい。」と言います。

母はしかたなく飼ってもいいよと思いましたが、家には虫かごがありません。なので、「虫かごが無いから飼えないわよ。」と言いました。すると太郎くんはどこかへ行ってしまいました。



C①

しばらくすると、太郎くんはバケツを持って戻ってきました。「これで飼う!!」目をキラキラさせて自信たっぷりにいました。でも、バケツはクワガタにとってせまいのではない

でしょうか。しかし、母は、太郎くんの飼いたいという気持ちに負け、大きい虫かごを買ってあげました。

太郎くんは大喜びし、クワガタをたいせつに飼いました。母も虫かごは高かったですが、太郎の笑顔を見て満足でした。

また、いつかこの親子の日常をのぞいてみましょう。

1回目の「練習」では「台詞」と「ト書き」のスタイルでまとめていたが、2回目の「本番」では、それを改めている。ひょっとしたら、2枚目の絵図から「クワガタ」を発想したのかもしれない。

この作文でも、「また、いつかこの親子の日常をのぞいてみましょう。」と終わっている。「20枚の絵図で書く看図作文」を楽しんでくれたのであろうか。

7. 逆境を乗り越えた力ギは？

今回の「看図作文の授業」は、従来の「看図作文の授業」とは大きく異なる点がある。その異なる点とは、次の2点である。

①通常の「看図作文の授業」では、「絵図の読み解き」に時間をかける。ところが今回の授業では、それを完全にカットした。使った絵図は20枚。しかも、生徒一人ひとりが手にしている3枚の絵図は、みんな違う。一人ひとりに合った「絵図の読み解き」は、実質不可能であったからである。

②通常の「看図作文」では、ストーリーをつくる段階で「協同学習」の時間をとる。ところが今回の授業では、それを一切おこなっていない。これも①と同様に、生徒一人ひとりが手にしている絵図は、まったく異なるものである。グループ内で交流するにしても、アドバイスし合う余裕などない。自分のストーリーを思いつくのに精いっぱいだからだ。

そんな逆境の中でも、ほとんどの生徒たちが 1 回目の「練習」でも 2 回目の「本番」でも、ある程度の質のストーリーを紡ぎ出すことができたのは、なぜか。

それは、何と言っても「絵図の力」である。授業者の実感として、そう断言できる。複数の解釈を生み出すことのできる「20 枚の絵図」が、生徒たちの想像力と創造力を飛躍的に高めたからこそ、今回の授業が可能となったのだと実感している。

なお、この授業は、昨年度の終わりに中学校 2 年生を対象におこなわれた。私は、2021 年 4 月からこの学年に所属している。生徒にとって「看图作文の授業」は初めてになる。そこで「20 枚の絵図の授業」の前には、次のように授業をおこなっている。

- A. 絵図 1 枚の授業。題材は「ネギをめぐる戦い」。
- B. 絵図 2 枚の授業。題材は「イスの世界」。
- C. 絵図 3 枚の授業。題材は「新・桃太郎」。

A と C については、鹿内信善編著（2014）で紹介されている。また、B については、本研究誌 2 号（森 2020）で紹介した。

本研究誌の 2 号で私は、次のように述べていた。「看图アプローチの源流は、看图作文にあります。看图作文の授業にも、看图アプローチの授業に勝るとも劣らないステキな実践群があります。」

私は、国語の教科担任として「看图作文の授業」を実践している。しかし、学習者のスキルやマインドをピッカピカに磨くことのできるこの「看图作文の授業」を、校種を問わず、そして、教科を問わず、多くの方々に実践していただければ、と強く願っている。

引用・参考文献

森 寛 2020 「『看图作文』のススメー誌上・模擬授業体験をー」『全国看图アプローチ研究会研究誌』 2 号 pp.12-19

鹿内信善 2003 『やる気をひきだす看图作文の授業ー創造的「読み書き」の理論と実践ー』 春風社

鹿内信善編著 2010 『看图作文指導要領ー「みる」ことを「書く」ことにつなげるレッスンー』 溪水社

鹿内信善編著 2014 『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ 協同学習の新しいかたち ● 看图作文 レポートリー ●』 ナカニシヤ出版

2022 年 5 月 9 日受付

2022 年 5 月 19 日受理